

第十六編  
名所  
旧蹟

第十六卷 卷末 印刷部

### 大正天皇御野立所 (佐 堂)

近鉄久宝寺駅北西方約1町余布施市金岡に接する所約10間周囲に植樹があつて中に丈余の記念碑があり、大正3年11月17日陸軍特別大演習の際大正天皇が行幸あらせられ約1時間に亘つて親しく御統監遊ばされた所である。

### 顯 証 寺 (久宝寺)

真宗本派の別院格で別名久宝寺御坊と呼ばれ、河内11郡の末寺を統轄していた互刹である。その前身は西証寺と称し、蓮如第11男実順が住んでいた。処が実順若くして遷化し後嗣がなかつたので、享祿2年10月近江国大津三井寺の南別所近松の近松山顯証寺に在住していた蓮如第6男の蓮淳を寺号もるとも当地へ移り住せしめた。

その建坪総計965坪近年まで後庭には有名舍月軒という茶室もあつた。堂宇は宝永7年4月に再建されたものである。

### 大 信 寺 (八 尾)

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれ真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶長12年3月に建立された、本堂は棟行17間梁行15間、その広間書院庫裡太鼓楼等の大建物が聳えている。書院の襖24枚は円山応挙の筆と伝えられ、なお天明8年正月本山本堂炎上の際はこの本堂を解体京都に引移し、その後憲政11年12月還付され再び当地に建つた。ところが昭和28年3月3日突如本堂大屋根が落ちたので取壊ち近く旧復の予定である。

### お 逮 夜 市

毎月11日と27日盛大な露天市が行われている。この露天市は久宝寺御坊と八尾御坊との間数町に亘りお逮夜市と言われこの両寺院に関係深い。

もので、お速夜は忌日又は命日の前日で例月27日は親鸞上人の速夜に相当し、両寺院ではその法要を盛大に嚴修するので、近郷の善男善女が多く参詣し法話を聽聞する人が群集する処商人又集り沿道に店を張るようになったのであろう。この市は古く織田、豊臣の時代から続いているよ  
うである。

### 大聖將軍寺 (太子堂)

草創は聖徳太子と伝えられ俗にに下の太子と呼んでいる。聖徳太子が物部守屋を御討伐の時この地で両軍が大激戦を演じた守屋の軍勢は強く太子の軍は非常に苦戦に陥り太子の御身は危くなつた。丁度その時路傍に大きな掠の木があつたので、太子はこれに身を避けられ無事に難を免れられた。太子はこれが大変喜ばれやがてこの地に伽藍を建立、神妙掠樹山大聖將軍寺と名づけられたと云う。後数度の兵乱に伽藍は荒廢し又明治21年の暴風に本堂は倒壊し全く旧觀を失つた。本尊は如意論觀音で室町初期の作と思われる。又太子16才の聖容も奉安している境内に老掠樹があり附近には守屋の首洗池、守屋の墳がある。

### 日 羅 寺 (木ノ本)

日羅寺は樟本神社の境内に荒れ果てた一小堂宇となつて僅に往年の名残を辛くもとどめている。開基日羅は火の葦北の国造阿利斯登と云う人の子で宣化天皇の御代にこの人親子が外交使節として百済に遣われた。賢明なので百済王に愛され官につけられた。丁度日本では任那政府の再建が計画され、半島事情に明るい日羅を召還せよとの議が起り、敏達天皇12年に紀国造押勝、吉備海部直羽島の二人を使節として日羅の召還を申入れた。百済王は日羅を惜んで申入れに応じないので重ねて羽島を遣わし今度は強硬に談判、百済王はついに恩率、徳爾の二人を日羅に随伴させて帰国を許した。

朝廷は阿斗桑市に館を造つて日羅をおき優遇された。この阿斗桑市は

木ノ本の古名だと伝えられここに一字を建立して薬師仏を安置したのがこの日羅寺だと云う。その後朝廷では、しばしば使を馳せて日羅に策を問われ彼は又悉きにその策を具申した。百濟より目付役として随伴した恩率、徳爾等は災の祖国に及ぶを恐れて帰途ひそかに謀つて日羅を暗殺したと伝えられている。

### 常光寺(西郷)

臨濟宗南禅寺派に属する禅刹で、本尊が地藏菩薩である所から、八尾地藏と云う方が広く知れている。日本三地蔵の一に数えられ、古狂言にも八尾地藏の一作があり、古くから知られた名刹である。

聖武天皇の依願により行基が建立し新堂寺と称した。この地藏菩薩の本尊は弘仁年間に小野篁が彫刻したものである。寛治2年に白河法皇は本尊の靈験を聞かれ御参詣の時人面舍利を奉納せられた。その後戦火に堂塔は大破荒廢し、至徳2年7月、又五大夫藤原盛継はこれを旧に復した。明徳2年足利義満は当寺の住持通玄東堂に帰依し荘田、梵鐘初日山及び常光寺の扁額を寄進した。これより旧号を改めて常光寺と称することになったと云う。

天正17年には豊臣秀吉が病氣平癒祈願のため米五石を寄進され、又慶安元年8月徳川家光、寺領17石2斗余を寄進し、引続き歴代將軍より御朱目を賜つた。

境内に入尾別当頭幸及び藤堂家臣七十一士の墓、八尾寺内村開発者森本行誓居士の供養塔がある。寺宝仏舎利、義満の扁額畠山三好氏一族の寄進状制札、応永6年の常光寺縁起、永正6年の勸進帳、嘉慶2年在銘の鯛口等がある。例年4月24日に大施餓鬼会を嚴修し境内では地藏踊と云う大盆踊が行われ、河内の一名物となつている。

### 龍華寺大門跡(植松)

龍華寺は称徳天皇が神護日京雲3年10月朔日に由義宮へ行幸の節遊覧

せられ、当寺へ塩30石施入された事が続記に見えている。草創は奈良前記と思われるが明らかでない。

其の後桓武天皇延暦19年に燈明料として若江郡の田1町5反を賜施されている。以後の竜華寺については史書では明らかでないが現安中小学校の辺に大門と称する地とその大礎石が二基田の中に千古の名残を留めている。

#### 木村長門守重成之墓（西郡）

墓は西郡北の辻北端にある。碑石高さ3尺、台石高さ約2尺、周囲1丈2尺で南面し、碑石は角であるが、殆んど円味を帯びている。この碑石は彦根藩士安藤長三郎次輝が、重成百五十忌辰に菩提のため建てたもので、この先祖安藤長三郎重勝こそは、重成の首級を挙げた人である。

慶長20年5月6日豊臣方の將木村重成は若江に陣を布き、徳川方の側面攻撃に出た。徳川方の藤堂、井伊の兩隊と西郡若江に激戦を展開し重成は藤堂隊を撃破し相当損害を与えたが、つづいて井伊隊の攻撃をうけ終日戦の疲労と衆寡敵せず、遂に重成は庵原助右衛門朝昌の槍にかかり落馬し、安藤長三郎重勝すばやくその首をあげた。家康がこの首を実験した時ゆかしい伽羅の匂がしたので重成の用意周到を歎賞したのは名高い話である。大正8年大阪府がこの戦蹟に「此の附近重成奮戦之地」の標石を建てた。

#### 飯田忠彦旧櫓の地（八尾慈南町）

慈南町開成坊より東方にかけて一帯が、飯田忠彦の邸の跡である。

飯田忠彦は野史291巻諸系譜80巻その他多数の著書を残した国史の研究者で、晩年は史料蒐集のため諸国を遊歴したが、その青壮の時代はこの地にあつて読書に没頭した。当時は彼を評して二階の先生と渾名したそうである。先生は周防の徳山里見新十郎の二男で、幼時より明敏恰利13・4才で経史に通じ、又武技にも秀でていた。

文政元年河内に遊学し八尾の大庄屋で學問を好む飯田忠右衛門は彼を迎えて嗣とした。

その後安政6年江戸に赴き、天保6年華頂宮の指南役となり、ついで有栖川宮に奉仕、天保10年中宮寺宮の内容客となり、去つて又有栖川宮の侍臣として京都に住んだ。万延元年櫻田門事件が勃発し、交友の關係から彼もその嫌疑をうけ、伏見奉行所に拘置され、残酷な幕吏の取調べに憤慨し割腹、時に年63才であつた。

### 切支丹墓碑(西郷)

西郷共同墓地に一見、舟底型の碑がある。高さ2尺、幅1尺4寸8分、厚さ約7寸、表は平面で大体円味をしてその先端がやや尖つている。その上部に大きな十字架、下に横書でIHS、またMANTOとあり、右側に天正10年壬午、左に5月25日と刻んである。この頃は我国キリシタンの最盛期で墓碑は他所にも発見されたが、大体は板碑型立石か蒲葺型置石で年代的に見ても元和、慶長期のものが多い。然るに本碑は舟底型で時代も一層古いので、学界ではこれを珍重し、重要美術品に指定された。

若江城主三好義継の重臣池田丹後守は織田信長が若江城を陥れた後は信長の臣となり、若江、八尾兩城の守護の任にあつた。この人は永祿6年洗礼を受けてドン・シメオンと名のつた程の篤信者で家臣も亦大多数信者になつたらしく当時八尾には大多数の信者がおり、教会堂を設けて盛に集会していた事は明らかである。八尾では古くからバテレン屋敷という約二百坪の地がある。明治初年頃までは周囲に家が建つても、この土地だけは藪笹が繁茂していたそうで又この地に次のような伝説が残つている。切支丹禁制の令厳しく教会堂も破毀せねばならなくなつたのでその鐘をこの地下深く埋没したが、不思議や夜が更けると地下で鐘がうらめくそうに鳴り響いたといわれている。

伴林光平翁彰忠碑（成法寺）

大字成法寺に、幕末の頃教恩寺と云う荒れ果てた寺があつた。天保の末頃光平が江戸から呼び帰された時、住む家がなく人の世話で無住の教恩寺の住職となつた。時に弘化二年三十三才の働き盛りであつた。檀家は僅かに十数戸、貧しい生活であつたが、文久元年二月大和法隆寺の駒塚の草庵に去るまで実に十六年間この寺に住んだのである。光平は住職となつたが仏事勤行は本意ではなく、国典を講じ和歌を教え、荒陵の探査に最大の努力を捧げた。

現在この教恩寺の跡に「贈従四位伴林君光平碑」と書いた彰忠碑が建つている。その裏面に光平翁伝が刻んである。碑の右側に古い瓦葺の平家があるこれは教恩寺の本堂を半分に縮めて建てなほしたものである。

翁は文化十年九月九日に南河内郡道明寺村大字林の尊光寺という寺の二男に生れ六才の時母を失い同郡丹比村の西願寺に養われ、十六才の春上京し西本願寺の学寮で仏学を治め、二十二才で本山学寮の因明論講の教授となつた。その後国学及び和歌の道を究めんと諸国を遊歴、中村良臣、飯田秀雄、加納椿平等に学び遂に天保十年二十七才の時、江戸で国学の大家住友に師事した。西本願寺はこれを知り、僧侶が国学を専攻するを非とし止むなく呼び帰され、八尾成法寺の教恩寺に入つた。文久三年八月天中組の大和義拳起るや、馳せ参じて勇戦したが利あらず、同年九月廿五日幕吏に捕われ、元治元年二月十六日五十二才にして、京都六角の獄にて斬られた。著書は河内国陵墓図、大和国陵墓検考、巡陵記事、難解機能重荷、河内国上古水土考、枯物語、三政一致説、於母比伝草、垣内七草、歌道大意、野山のなげき、篠屋独語等多数あるが殊に南山踏雲録は著名である。

環 山 樓（八尾）

同樓は八尾の豪族石田氏の設立した学舎で、その創立年代は明らかで



ないが享保十二年に京都の碩学伊藤東涯が、この所に招かれて書を講じた際に名づけられたものでこれによると環山樓の名は青山一脈、高安山南に走り、二上、金剛の連峰が遙かにこの樓を環つて一望の裡に在り、勝景の亭館人々集つて、先人の遺書を繙き、古道を尋ね、相共に古今を慨し、尙道遺在するの感慨を深め、その席上で東涯因んで名づけたのである。

当時各地に郷学、私塾の創立せられ、平野に於ける含翠堂、久宝寺には麟角堂があつて、この環山樓と共に夫々学者を招いて、講筵を開き、世人の教導に資した。

享保十二年京都の碩学伊藤東涯が平野の含翠堂に遊歴講説の時当地の石田利清その叔父利長、従弟可承飯田通古等この所に会してその來講を乞ひ請席を開いたのであつたが、この席に受講した人に利清の弟孝鳳、従弟利穹及び登口孤島等がありその後郷民の教化に努めたのである。

翌々十四年伊藤東涯はこれを偲び深い感慨の裡にこの樓記を贈つたもので利清は当時二十一才字は嘉右衛門義萍と号し賢明智策の才であり、弁舌を能くその識才郷党一門に名高く、郷間の子弟等はその徳風学識を慕つて教を乞ひ私淑する者多く、また体風があつて理非曲直を弁ずるのに厳正無私であつたので人々再び争うことが出来なかつたという。

また知名の学者を招いて講席を設け、或は共に書を繙いて郷里の馨鑛となつた。宝暦十四年五月五十九才で歿した。

### 樟本神社(木ノ本)

延喜式に「樟木神社三座」とあるが当社で木ノ本、南木ノ本、北木ノ本の三部落に各一座づつ鎮座祭神は布都明神で、物部守屋の靈とも伝えられている。この地は物部氏の本居であつて守屋池とか稻城の跡等の伝説がある。

### 澁川神社(植松)

祭神は、天忍穗耳命と饒速日命で他に攝社が四つある式内の郷社で境

内一千八百三十九坪、老樹繁茂して荘嚴な神域である。当社はもと旧大和川（現在長瀬川）の東北岸に鎮座していたのであるが、天文二年五月五日に大和川が氾濫し社殿が悉く流失し、現在の地に遷し奉安した。旧若江、澁川の兩郡はこの川を境としていたので当社は延喜式には若江郡とあり、河内誌には澁川郡とあるのは前記の事情による。

### 矢作神社（別宮）

姓氏録河内国未定雑姓の部に「矢作、布都奴志乃命之後也」とあつて当地は矢作部の本居で、その祖神経津主命を祀つたのが当社の起原であろう。式内社で明治六年郷社に列せられ一名掃部宮とも、別宮八幡とも呼ばれている、石清水八幡宮に現存する永久四年九月の大政官牒に、石清水八幡宮の全国各地にあつた社領を明記しているが、その中に老処字掃部別宮、若江郡御供田伍町玖段とある。これによると当地にその所領があつたため、いつの頃よりか石清水の分霊を当地に勧請し、別宮としたことが推察出来、又掃部宮別宮八幡と称する所以も知られる。

### 許麻神社（久宝寺）

祭神は許麻大神と云う。姓氏録河内国諸藩に「大泊連出自高麗国人伊利斯沙礼斯也、又大泊連、出自高麗湊士福貴王也」とあるこの伊利斯沙礼斯の後は、大縣郡巨麻郷に居住しその祖神を祀つた。即ち現在の柏原町堅上の奥大字本堂の大泊神社であり、福貴王の後が本居としたのが許麻荘（久宝寺）である。河内誌に「在久宝寺村、今称天王有古筒、所謂色紙形者筒上題目、河州澁川郡許麻荘、神武、明星沢和歌日、許麻乃里沢辺爾生留杜若、君加手每乃、水也加皿佐牟神武隄名、明星沢在村西北生燕子花、首夏盛開」とあり、古來より燕子花の名所とされていたが、今はその面影も留めない。

なお当社は、久宝寺観音院の跡で同院は古義真言宗洛西御室御所真光院の末寺で大悲閣と呼ばれ記録に依れば久宝寺は聖徳太子の御建立で、

同太子自作の十一面観音を本尊とし推古天皇二年三月勅願所となつて以來当国仏法を中心として栄えたが、遂に松永彈正尙秀の兵火に罹り悉く鳥有に帰した、時の住持源山和尚は、本尊を背負い伊賀国下津に難を避けたが、永録九年五月病没するに及んで本尊は又当地へ還されたのでここに小堂を建立し、本尊を安置した。なお同院の鐘樓にあつた梵鐘は、その響殷々十里内外に及ぶと云われる名鐘で明治の初年の廃寺処分に行方不明となつたが、現在ソ連モスコフ・ニコライ堂に健在であるといふ。当社の井戸屋形はこの鐘樓を修繕して記念したものである。

### 阪神飛行場

米駐留軍のヘリコプター部隊の基地として使用されていたが昭和29年4月米駐留軍の他地集結により新に保安隊第三管区航空派遣隊が駐屯している、またその一部を大阪における大新聞社の専用機格納所にも使用されている。



昭和二十九年七月十五日 印刷  
昭和二十九年七月二十日 発行

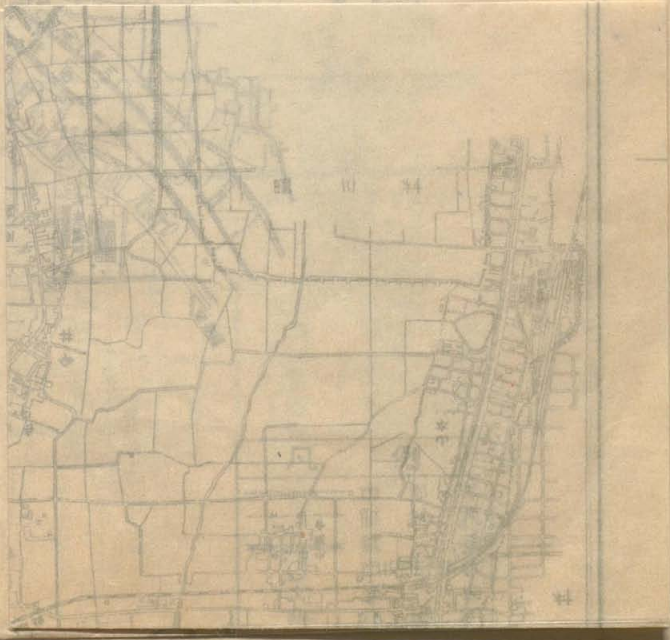
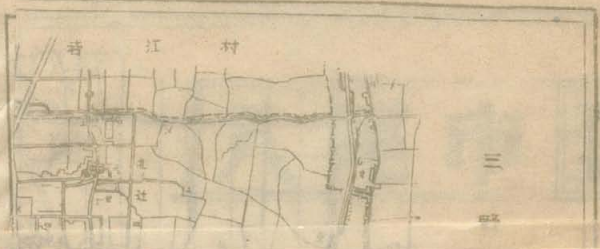
(非賣品)

編集兼発行人 八尾市役所広報課

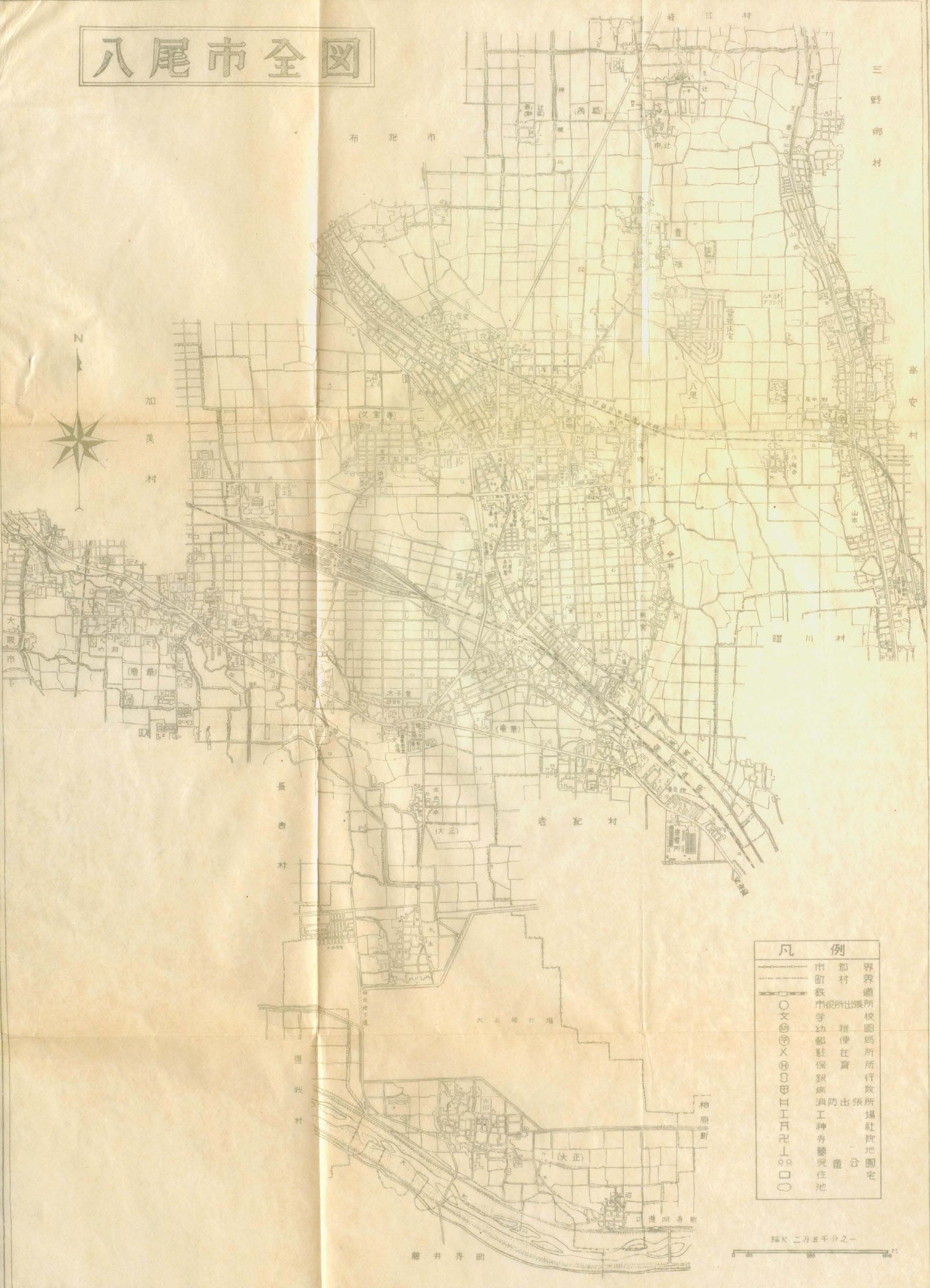
発行所 八尾市役所

大阪市外巽町伊賀ヶ

印刷所 秀文社出版印刷株式会社



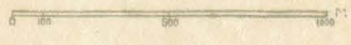
# 八尾市全圖



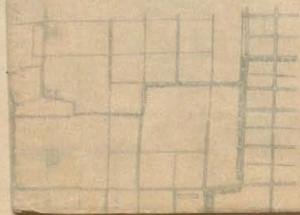
凡例

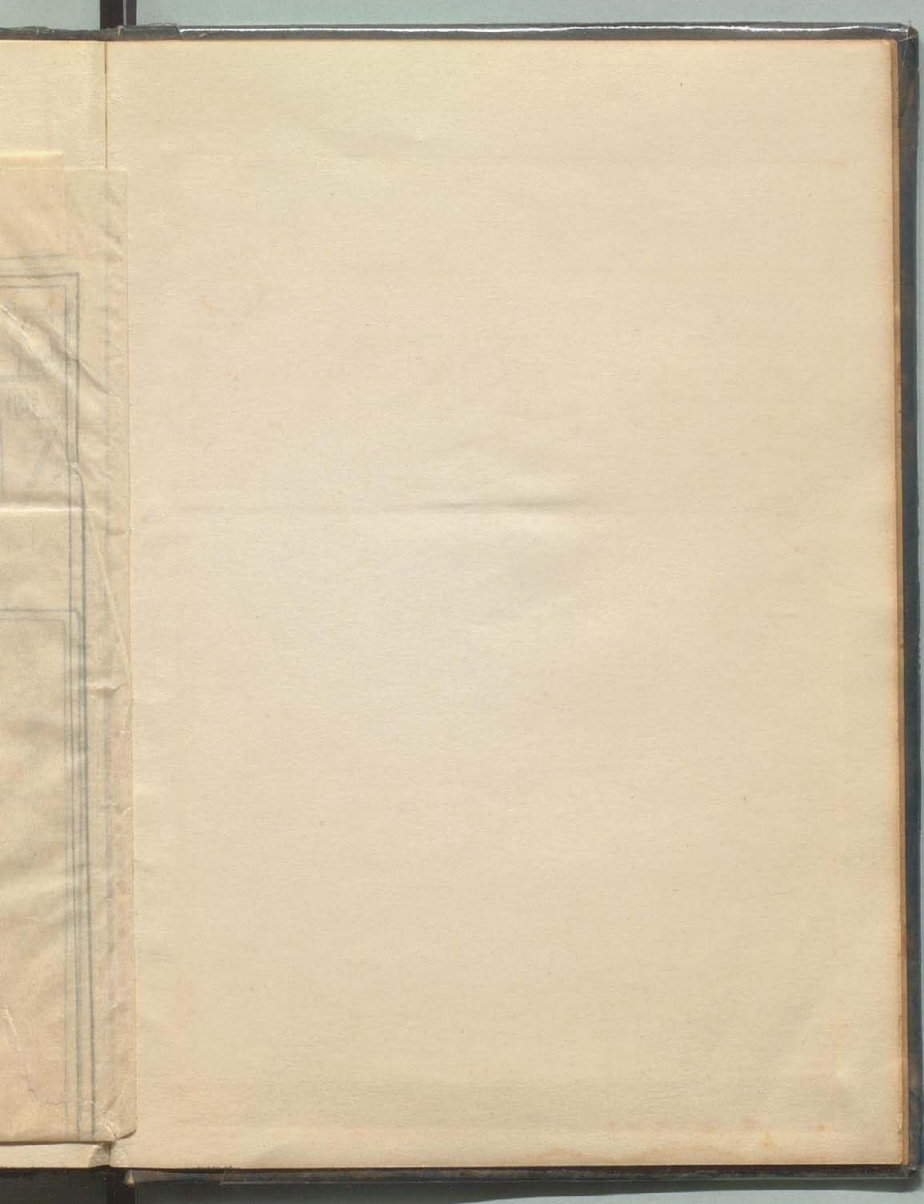
——	市郡界
——	町界
——	鐵道
○	市役所出張所
⊙	文藝會館
⊗	幼稚園
⊕	郵便局
⊖	保健所
⊙	銀行
⊕	消防出張所
⊖	工務所
⊙	神社
⊕	寺
⊖	児童園
⊙	池
□	重公
○	住宅

縮尺 二万五千分之一

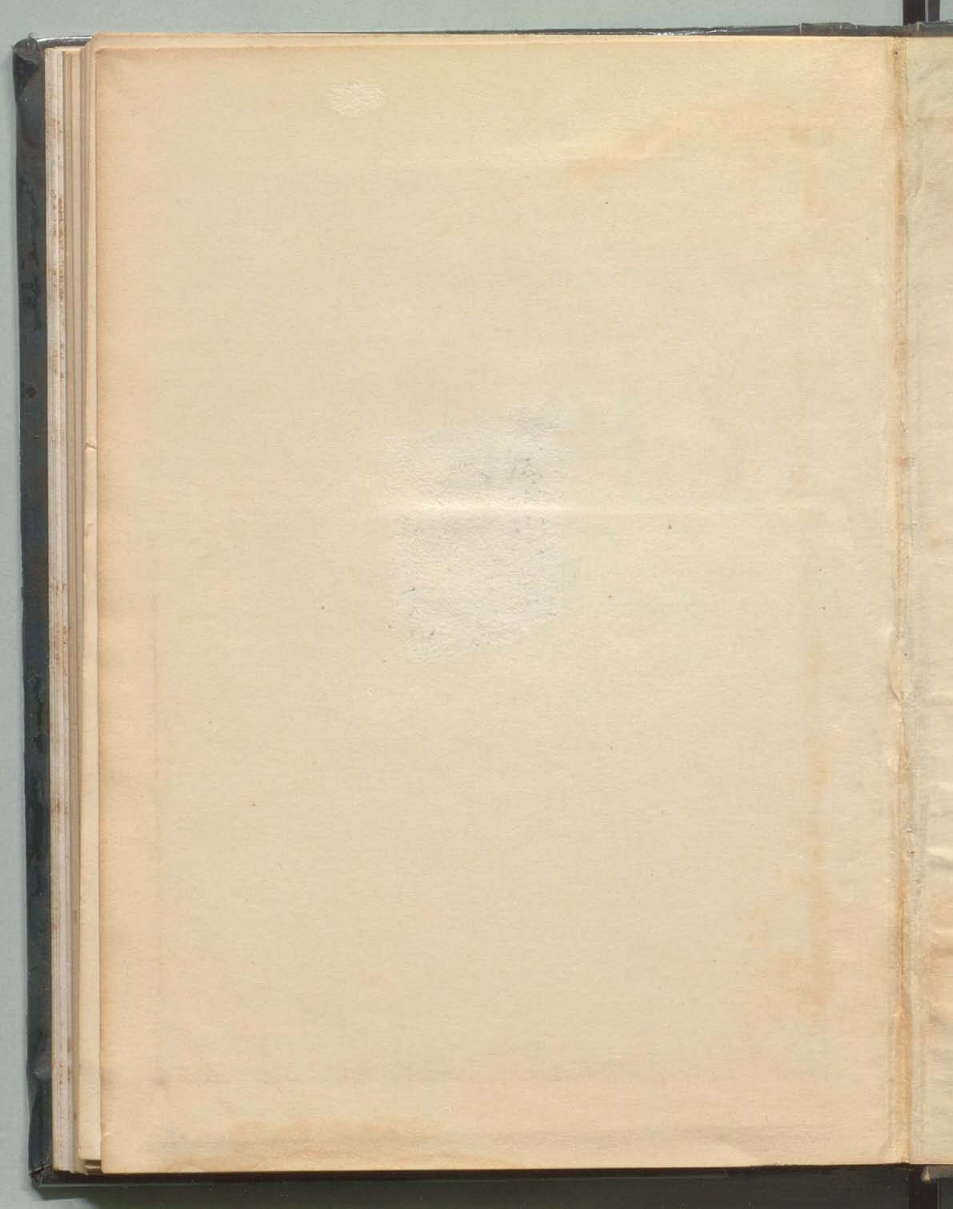


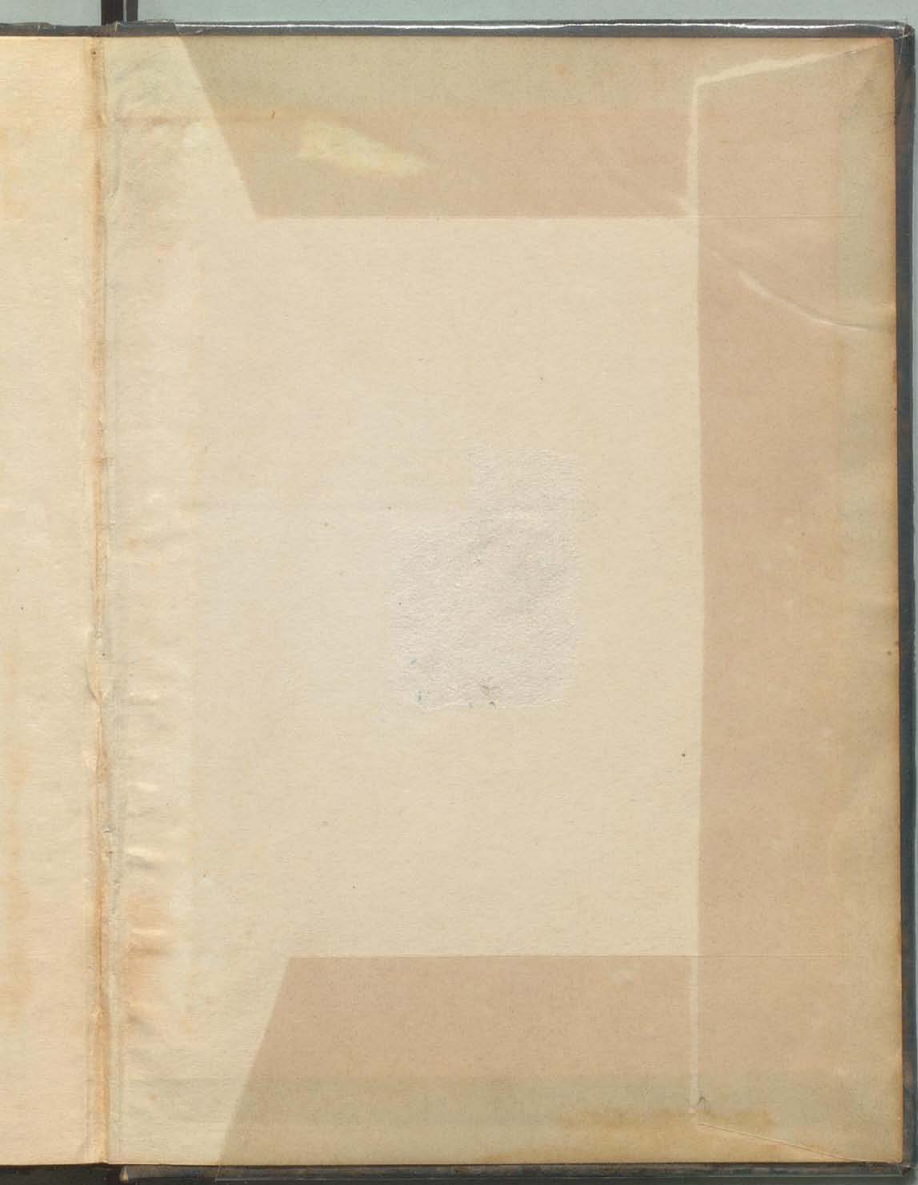
八里市全





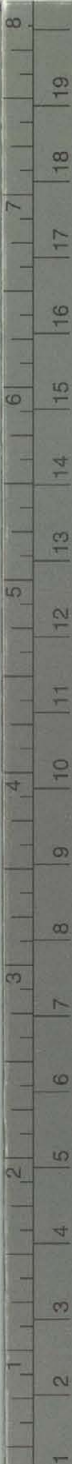








inches  
cm



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
Light Blue	Light Cyan	Light Green	Light Yellow	Light Red	Light Magenta	White	Light Gray	Dark Gray
Dark Blue	Dark Cyan	Dark Green	Dark Yellow	Dark Red	Dark Magenta	White	Dark Purple	Black

# Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

